



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『クロイツェル・ソナタ』と『平凡』：キリスト教的性愛観への反撃
Author(s)	村上, 孝之; Murakami, Takayuki
Citation	スラヴ研究, 38, 1-16
Issue Date	1991
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5194
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113325.pdf



『クロイツェル・ソナタ』と『平凡』

——キリスト教的性愛観への反撃——

村上孝之

二葉亭四迷は「『平凡』物語」と題された談話筆記の中で、小説『平凡』の狙いについて次のような述懐をしている。

『平凡』かね。いや失敗して了つたよ。[……] 本来堂々と正面から理屈をやるつもりだつたのが、いざ書いてみるとどうも冷嘲す様な調子になる。で、真面目にならう真面目にならうと頻りに骨折つたがどうしてもいけない。つひ終ひまで諧謔通してつた。その意味に於て全く失敗さ。

そこはトルストイなどは彌然^{ひや}旨いものだ。あのクロイツェル、ソナタ。あれなどは全然^{まるで}理屈をやつてるものだ。[……] で、実は自から揣^{はか}らずに、一つ彼所^やを行つて見ようと懸つたのだ¹⁾。

この談話からも明らかなように、二葉亭の『平凡』はトルストイの『クロイツェル・ソナタ』(Крейцерова Соната, 1990) に刺激を受け、それを模倣しようとした作品であった²⁾。その際、二葉亭がトルストイの小説から受けた影響は、まず第一に、「正面から理屈をやる」という方法上の問題だったわけである。事実、『クロイツェル・ソナタ』は実に明確なメッセージを持ち、その表出を骨子とした小説であった。

そのメッセージはトルストイ自身が「後書き」に要約している。すなわち、あらゆる性的関係は聖書に明記されているように悪であり、婚姻関係のもとでもその事情は変わらない、ところが人は結婚によって性行為が正当化されると信じ込んでしまっていて、その結果、世間一般の結婚は欺瞞に満ちたものになっている、というものである。

トルストイは、結婚は、貞潔の理想を守ることの出来ない者のための次善の策に過ぎないというパウロ的解釈を持ち出し、教会が結婚に与える権威付けも退け、結婚を正当化していると思われる「恋愛」(ЛЮБОВЬ) というような概念そのものをも否定しざる。例えば、トルストイは、彼の思想の代弁者であると考えられる主人公のポズドヌイシェフの口を借りて次のように論じるのである。

全く汚らわしいことなのですが、愛とは何か理想的な高尚なものと理論上は考えられているのに、実際には、愛とは嫌な、下劣なものなのです。愛というものは、それについて話すのも、いや、それどころか思い出すのさえいやらしく、恥ずかしいものなのです。[……] ところが反対に人々は、いやらしい恥ずかしいものが美しい高尚なことであるようなふりをしているんですよ³⁾。

ポズドヌィシェフはここで、「愛」(ЛЮБОВЬ)と呼ばれるものがそもそも欺瞞に過ぎないと主張しているわけだが、もちろん、この「愛」はキリスト教的な愛の概念そのものを指しているはずはない。別な箇所ではポズドヌィシェフは次のようにも言っている。高尚な、詩的な、「いわゆる」愛は精神的価値に依存せず、肉体的な親密さに拠っている、と⁴⁾。

つまり、『クロイツェル・ソナタ』で「愛」ということが言われる時には、それは純然たる肉体的欲情のことであり、また、その欲情を美化するための神話の体系を意味しているのである⁵⁾。あらゆる性的感情は邪悪であり、下劣であるにも関わらず、一般には、いわゆる「愛」というような概念でこれを美化しようという試みがなされている、とトルストイは考える。

トルストイの、「愛」の言説に対するこうした批判は、そもそも、チェルニシェフスキーが『何をなすべきか』(Что делать?, 1862-63)の中で理想化した男女関係に向けられていたとされている⁶⁾。チェルニシェフスキーは、友愛に基づいて理想に邁進する男女を結合させる原理としての結婚というイメージを作品に描き出したが、そのような恋愛観・婚姻観は1860年代の進歩的西欧型知識人にとって、一つのファッションとなっていた。『何をなすべきか』はトルストイにとって、そうした進歩的男女関係、恋愛結婚イデオロギーを代表する作品であり、『クロイツェル・ソナタ』に「恋愛」批判のコンテクストを与えるものであった。『クロイツェル・ソナタ』の中では直接に『何をなすべきか』の名は挙げられていないが、トルストイはさまざまな作品において60年代人の理想であった「恋愛」に明白なあてこすりを行っており、『クロイツェル・ソナタ』でそのような結婚観が弾劾されていることは疑いえない⁷⁾。

『クロイツェル・ソナタ』は、汽車に乗り合わせた人々が愛や結婚についてかわす議論で始まるが、ここでトルストイは要領良く問題点を整理し、後で展開されるべき主題の枠組みを作っている。その部分で揶揄気味に描かれている貴婦人の主張が、この1860年代的な「愛」の考えを代表しているように見える。彼女は「愛がないとしたら、どうしてその人と一緒に住むことが出来るでしょうか」と主張するが、その考えは「彼女にとってたいへん新しいものに思われた」と説明されている⁸⁾。

チェルニシェフスキーが展開した「自由な恋愛」、「自由な結婚」という概念は、『何をなすべきか』の発表以来、一貫してトルストイを苛立たせてきたものであった。しかし、同時にこの「愛」はもう少し広いコンテクストに位置付けることもできるだろう。チェルニシェフスキーが表現した、気質や理想の一致、友愛的関係に基づく結婚という思想自体、ルソーが『新エロイズ』の中で展開したものであり、近代西欧の市民社会が生み出しつつあった「恋愛結婚」という観念を、いち早くロシアに輸入したのもであった。チェルニシェフスキーは、『何をなすべきか』を執筆していた、ペテロバロフスク要塞での幽閉生活中に、ルソーの作品を体系的に読んでいる。その成果として、『懺悔』の翻訳(Исповеданное Жаном Жаком Руссо)や『ルソーの伝記のための覚え書』(Заметки для биографии Руссо)などが書かれたのである⁹⁾。チェルニシェ

フスキーは『何をなすべきか』の中で、作品の主人公たちが示したような愛の形は、『新エロイズ』で初めて現れたと明言しているのです、この影響関係は明白である¹⁰⁾。

『クロイツェル・ソナタ』では、導入部の汽車の中の会話で、貴婦人と同じ立場を取っていると思われる弁護士は、次のように述べる。「われわれ [ロシア人は] ヨーロッパ的な結婚の考えからはまだ遠い。」これを受けて貴婦人は、ロシアでは、愛情のない結婚は結婚ではない、結婚を神聖にするのは愛情だけである、ということが理解されていないと付け足す¹¹⁾。ここで含意されているものは、近代西洋が生み出した恋愛と結婚に関する制度全般に違いない。

このような考えを批判して、トルストイはポズドヌィシェフに次のように語らせる。

みんなそのことを [男の結婚前の女遊び] を知っていながら、知らないふりをして
いるのです。小説には必ず、主人公の思いのたけが詳しく説明され、二人が散歩する
池や茂みがどんだか細かく描き出されています。しかし、主人公の男の、相手の娘
に対する偉大な愛情を描きながら、この興味深い男の身にそれまでに何が起こって
いたかというようなことはちっとも書かれていないのです。[……] やがて、そうした
知らぬふりに慣れてしまっ、ついにはイギリス人のように、自分たちがみんな清廉
潔白であり、道徳的な世界に暮らしているのだと、本当に信じるようになってしま
うのです¹²⁾。

こうして見ると、トルストイにとって「愛」(любовь) という言葉で名指され、偽善だとして否定されているものは、19世紀の西欧のロマン主義的な恋愛の言説であったと同時に、広く、近代西洋文化が——あるいは、その中でも最も先進的な市民社会であったイギリスが——措定したところの「恋愛」の概念そのもの、そして、「恋愛結婚」のイデオロギーであったことがわかるのである¹³⁾。

このことの意味は、『クロイツェル・ソナタ』とほぼ平行して書かれていた『芸術とは何か』におけるトルストイの思想的展開と比較して考えるならば、より明白である¹⁴⁾。つまり、『芸術とは何か』においてトルストイが単にある特定の文学作品、流派を否定したのではなく、「文学」や「芸術」そのもののほとんど根本的な否定にたどり着いたのだとしたら、それと軌を一にして、「恋愛」という行為そのものが『クロイツェル・ソナタ』において全面的に拒否されるに到ったのだ、と見ることもできるだろう。

そのような平行関係は、次のような点からも窺い知ることができる。『クロイツェル・ソナタ』の第一稿では、偽りの愛を描出するものとして、キリスト教的な愛とは異なる「情欲」の同義語として、必ず романс の語が選ばれている。例えば、生けるドモストロイの商人が貴婦人に言う言葉だが、《Любовь, сударыня, христианская, братская сильнее каменных стен. А что вы изволите говорить, это не любовь, это романсы. А от романсов-то и любви нет.》¹⁵⁾ というような形で、キリスト教的ではない愛と「恋愛叙情詩」の結び付きが語られている。ところが、最終稿では先ほどの引用でもそうだったように、注意深く роман の語がこれに置き換えられているの

である。

ここからも、トルストイの思想的展開を跡付けることができる。すなわち、愛の欺瞞は恋物語やロマンティックな叙情詩の世界にだけあるのではなく、あらゆる文学が、そして、それが描き出そうとしている近代西洋の社会全体に蔓延していると、トルストイは考えるに到ったのであろう。トルストイの文学批判，芸術批判が次第に徹底的・総括的な性格を帯びるにつれて、恋愛や性愛に対する見方も徹底的なものになっていくのである。したがって、『クロイツェル・ソナタ』で言う「愛」とは、単に「ロマンティック」なものではなく、西洋近代が作り出し、文学が再生産して行った恋愛の言説全体を射程に入れていたと言えるだろう。

もっとも、『芸術とは何か』と『クロイツェル・ソナタ』はその対象を全く異にしており、日記を見ると、同じ時期に書かれてはいたものの、同日中に執筆されたことはなかったようにも見える。しかしながら、その基本的精神が共通するものであったことは、さまざまな表現から窺い知ることができるのである。

例えば、『芸術とは何か』には、現代のほとんどの文学が性的関係を描き出すことに熱中しているという指摘がある。「その後 [ルネッサンス以後]、芸術にはますます多くの性的要素が混入するようになり、今ではそれは富裕な階級の芸術作品にとって（ほとんど例外なしに。小説と戯曲ではあらゆる場合に）、不可欠のものとなっている。[……] ボッカチオからマルセル・プレヴォーに至るまで、全ての小説、長詩、短詩が、さまざまな形の性愛の感情を描き出そうと、たゆみなく精を出している。」¹⁶⁾

また、『クロイツェル・ソナタ』からの前出の引用で、「小説には必ず、主人公の思いのたけが詳しく説明され、二人が散歩する池や茂みがどんなだか細かく描き出されています」とあった表現は、『芸術とは何か』の「全て詩は恋や、自然や、作者の心情をうたう」という文章と響き合う¹⁷⁾。また、逆に、「後書き」の「[婚姻においてなされた貞操の約束が] 昨今の小説、詩、歌曲、オペラなどでされているように、讃えられることがないようにしなければならない」という文章が、『芸術とは何か』の内容と連なることは言うまでもない¹⁸⁾。

ところで、こうした、不健全でセンセーショナルな性的話題にのみ関心を持つ、芸術の担い手は『芸術とは何か』では、「不道德な人々」、「上流階級の人々」と呼ばれ、また、「ルネッサンスから宗教改革以降のキリスト教を奉ずる上流階級」と規定されている¹⁹⁾。トルストイの解釈においては、不道德的な文学や芸術を高尚な美と称して崇めているのは、やはり、プロテスタントに起源を持つ、近代的な市民階級であったのである²⁰⁾。

一方、トルストイは、こうして西洋市民社会が規定した恋愛の概念を、『クロイツェル・ソナタ』の中では、単に「愛」(любовь)と呼ぶのではなく、ときには更に限定して、「高尚な愛」(возвышенная любовь)、「詩的な愛」(поэтическая любовь)、「霊的な愛」(духовная любовь)というような表現を用いて、さまざまに言い替えている²¹⁾。ところが、この「高尚な愛」、「霊の愛」といった言辞は、明治の初年代にヨーロッパ文学から摂取した新しい恋愛観を作品の中に表明していった、日本の文学者たちが用いた表現をただちに想起させる体のものである。こうした言説は、主に『女学

雑誌』や『文学界』といった、西洋文学に目を開いた雑誌に拠っていた人たちによって広められたものであったが、例えば、『女学雑誌』に載った「色情愛情弁」という記事には、次のような記述が見られる。「この心情[男女の情愛]に二様あり。英語に一を「ラップ [love]」と云ひ一を「ラスト」と云ふ。「ラップ」は高尚なる感情にして「ラスト」は劣等の情欲なり²²⁾。」

トルストイの「高尚な愛」と、明治日本の文学者が名指した「高尚なる感情」を並置することが必ずしも強引な作業でないことは、この近代西洋の「ラップ」を初めて文学作品の上に表現したと思われる、二葉亭四迷の『浮雲』初編における問題設定が、『クロイツェル・ソナタ』において持ち出されている問題の枠組みと非常に似通っていることから推定されるのである。『浮雲』では、この世で一番大切なものは真理だと語るお勢を、文三は「清浄だ、潔白だ」と言って褒め讃える²³⁾。さらに文三は、相愛は相敬の隣に住む、すなわち、互いに愛するためには互いに尊敬し合う必要があるとつぶやく²⁴⁾。こうしたところでイメージされている愛は『クロイツェル・ソナタ』の貴婦人のそれに近いように見えるのである。また、女主人公のお勢は次のような述懐もしている。

私の朋友なんぞは、教育の有ると言ふ程有りやしませんがネ、それでもマア普通の教育は享してゐるんですよ、それでめて貴君、西洋主義の解るものは、二十五人の内に僅四人たつたよつたりしかないの。その四人もネ、塾にゐるうちだけで、外に出てからはネ、口程にもなく両親に压制せられて、みんなお嫁に往ったりお婿を取ったりして仕舞ひまったの²⁵⁾。」

この、「両親に压制せられてお嫁に往く」ことと対立する、「西洋主義」とは、自由な恋愛、気質や性格の一致に基づく恋愛と考えることができる。事実、上の引用に続く部分でお勢は主人公の文三に、自分が彼を親友とっており、また、その人となりをよく理解しているということを告げるのである。文三も、「人を愛するというからには、必ず先ず互ひに天性気質を知りあはねばならぬ」という信念を持っている²⁶⁾。

逆に、親の言う通りに嫁に行ったり婿を取ったりする、「女大学」的婚姻方式は、「ドモストロイ」流の結婚とパラレルであるかのように見える。親の言うままに結婚させるがよい、「愛」などは後から自然に生じてくると論じる「生けるドモストロイ」である商人に、愛がなくなったら一緒に住むことはできないと説く『クロイツェル・ソナタ』の貴婦人は²⁷⁾、お勢とほぼ同じ観点から物を論じていると見ることもできよう。『クロイツェル・ソナタ』の貴婦人は、ポズドヌィシェフに「あなたは性的な愛のことばかりおっしゃいますが、理想の一致や精神的類縁性に基づく愛はお認めにならないのですか」²⁸⁾と尋ねるが、このような考えは彼女にとって新しかったと同じく、近代初頭の日本の文学者にも新鮮なものだったのである。

このような新鮮な「恋愛」をトルストイはキリストの教えに反するとして批判したのであるが、逆説的なことに、こうした恋愛観を日本に輸入したのは、主にキリスト教系

の文学者たちであったわけである。先にも述べたように、西洋的な愛の概念は、概ね明治二十年代に北村透谷や島崎藤村らがその担い手になって紹介され、「高尚な愛」、「霊性の愛」というように定式化されていった。そして、こうした文学者は概ねピューリタンだったのである。例えば、透谷はエッセイ『伽羅枕及び新葉末集』に「恋愛は人類の霊生の美妙を發揚すべき者」というような表現を用いているが²⁹⁾、その透谷はメソジスト派の信者であった。

こうして、このとき始めて、男女の愛が神聖なものであり得るという観念を、肉体を捨象した精神的な愛という理念を、日本人は手に入れたと言えるのである。しかも、日本においては近代西欧の恋愛観はピューリタンの伝統に結び付いて入ってきた。近代西洋の愛、という意味で「愛」の語が用いられ始めたのは、透谷らピューリタンの文学者の用法に影響されたのであり、また、聖書における訳語にも規定されていた³⁰⁾。

ところが、奇妙なことに、この種の「高尚な愛」に敵対したトルストイ自身は、『クロイツェル・ソナタ』における性愛観を形成するに際して、ピューリタンの思考からの影響を強く受けていたのである。透谷や藤村ら日本のロマン主義文学者と、トルストイが双方とも同種の宗教的基盤、すなわち、ピューリタニズム的思惟の上に立っていたという逆説が、ここに生じてくる。

トルストイの宗教的思想がいかなる性質のものであったかは、一意的に解決できる体のもものでは到底ない。異端との関わり、正教会との関係、理神論的傾向など、さまざまな側面をトルストイの宗教思想は示している。彼の宗教観が「ピューリタンの」であったというようなことは、簡単にいうことができないのである。

しかし、少なくとも、性愛に対する見方の点で、晩年のトルストイがピューリタンの傾きを持っていたことは疑いを容れないだろう。聖書のテキストの厳密で合理的な読みから出発して、禁欲の理念を引き出してくるトルストイの意識は、まさにそのようなものと言わなければならない。

事実、『クロイツェル・ソナタ』で提示された、性行為の全面的否認——婚姻関係内部のものも含めて——という極端な考えにトルストイが到達するに至った過程には、さまざまな要素が介在していたが、そのうちの大きなものとして、シェーカー教徒の、性行為の放棄を謳ったパンフレットがあったことが分かっている³¹⁾。また、婚姻関係における禁欲・節制を説いた、アメリカの産婦人科医アリス・ストックハムの著書『産科学』(Tokology, 1883)に大いに感服したトルストイは、同著のロシア語訳を出すべく自ら奔走したが、この著者アリス・ストックハムはシェーカー教徒であり³²⁾、『産科学』は医学的粉飾を持つ、ピューリタンの禁欲道徳のパンフレットという色彩も帯びていた³³⁾。シェーカー教徒やシェーカー教徒の言説への親近感は、トルストイの、性に対する全面的な否定の説が、ピューリタンの禁欲的精神に相通じるところを多く持つものだったことを教えるのである。

もちろん、繰り返しになるが、トルストイの性愛観、婚姻観は一意的なものでは全くない。少なくとも、『クロイツェル・ソナタ』の最終稿を執筆していた段階のトルストイの思想が、このようにピューリタンの色彩を持つものとして性格付けることができ

るというだけのことである。

トルストイは第一稿では、むしろ「ドモストロイ」的な価値観に対する同情が大きく、「愛」などという原理ではなく、親の命令に従い、「法」に従うことによって、幸福な家庭が築かれると論じる商人は³⁴⁾、肯定的な人間像を結んでいる。

しかし、最終稿では「ドモストロイ」的道德への評価は下がり、この商人が皮相な形象に墮したことは、ゲーゼなども論じている（前掲書）。また、先ほども挙げたストックハムの『産科学』のロシア語訳（1892年）にトルストイ自身が付けた序文には次のような記述が見える。

[……]祖母や祖父がやってきたような愚かな暮らし方を続ける必要はまったくない（нет никакой надобности продолжать жить так же нелепо, как жили бабушки и дедушки）。そうではなく、科学や人々の経験、そして自由な思考の働きをつかって、よりよい生き方を探すべきなのだ³⁵⁾。

〈так же нелепо, как жили бабушки и дедушки〉とある表現は、トルストイの反「ドモストロイ」的な気分を反映しているのに違いない。こうして、トルストイの婚姻観・恋愛観は、「ドモストロイ」的な封建的なシステムの賛美から、節制と禁欲の精神に基づいた婚姻の秩序——それが極端な場合には婚姻の全面的否定となる——という近代的婚姻思想に発展していくことになるのである。そして、この絶対的な禁欲は、先にも見た通りピューリタンの思惟の変形と理解できるのである。

同じピューリタンの精神が、日本近代の恋愛の言説をも覆っていた。恋愛の唱道者たちが、多くは新教徒であったことは既に書いた通りだが、実際に、明治年間において「自由恋愛」、「恋愛結婚」を標榜する人間は、しばしばキリスト教徒に同定されていたのである。二葉亭四迷の『其面影』の初案において、ヒロインが「キリスト教徒」と性格付けられたことも、同じ文脈で考えることができるだろう³⁶⁾。そして、その二葉亭は、『浮雲』執筆の頃にはキリスト教の「愛」の観念に心酔していたことが日記などから窺われるが、彼のキリスト教理解の主な源泉はピューリタンの著作だったのである³⁷⁾。

ところが、二葉亭にあっては、キリスト教に対する青年らしい心酔は次第に醒めて行く。彼は『平凡』執筆の頃までには、キリスト教の考えに対してほとんど憎悪に近い感情を抱くようになっており、自伝『予が半生の懺悔』の中では、キリスト教の教えがあまりに独断的なので吐き気を覚えた、とまで言っている³⁸⁾。面白いことに、それとちょうど平行して、「霊性の愛」(spiritual love) というように定式化されるものに対する信頼も、失われて行っているのである。彼の文学的キャリアの総決算であった『平凡』の中で二葉亭がトルストイに対抗すべく提出した理屈を読むと、彼が『浮雲』における西洋式恋愛観からいかに遠い地点に来てしまっていたかということが分かる。今、作者二葉亭の思想をかなりの程度まで代弁していると思われる、主人公古屋の語る、その「理屈」を読んでみよう。

[私の雪江さんに対する恋愛感情は]余り平凡だ下らない。こんなのは単純な性欲の発動といふもので、恋ではない、恋はも少と高尚な精神的の物だと、高尚な精神的の人は言ふかも知れん。然うかも知れん。唯私のやうな平凡な者の恋はいつも斯うだ。

[……] 私共の恋の本体はいつも性欲だ。性欲は高尚な物ではない、が、下劣な物とも思へん。中性だ、インヂフェレントの物だ。私共の恋の下劣に見えるのは、下劣な性格が反映するので、本体の性欲が下劣であるのではない³⁹⁾。

二葉亭はこのように「高尚な愛」、「靈性の愛」というように呼ばれるものを性欲に還元することによって相対化する。その限りでは、彼はトルストイと戦略的に同じ地点にいるのである。トルストイは *возвышенное чувство* というような言葉を使って、ロマン主義が美化する愛を表現し、これを批判するが、これは二葉亭が言うところの「高尚な愛」という概念と極めて近いものに思われるのである。

ちなみに、二つの概念の結び付きを示すものとして、尾崎紅葉と小西増太郎による『クロイツェル・ソナタ』の訳文を見てみよう。紅葉らは《Любовь—союз душ》⁴⁰⁾となっている原文を「愛といふのは心の同一になつたのを云ふのだ」⁴¹⁾と訳出し、「愛」の語に「ラヴ」というルビを振っている。

「愛は魂の結び付きであるはずなのに、このていたらくだ [こうして妻と憎みあっている]」と語るボズドヌイシェフは、先に貴婦人が使った *духовное сродство* や *единство идеалов* といった表現を揶揄しているものと思われ、この「愛」は貴婦人の用法での愛、すなわち、友愛の理想に基づく、近代的な恋愛のことを指しているのであろう。つまり、ここの *любовь* は、*возвышенное чувство* の意味で使っているに違いないのである。一方、「愛」に「ラヴ」というルビを振るやり方は、透谷らが「近代西洋の恋愛」という意味で用いたやり方と同じであった。*love* に相当する概念を表現するために、「恋愛」という翻訳語が作り出されたのであるが、その創出・定着以前には、「ラヴ」と外来語をそのまま用いたり、「愛」と書いて「ラヴ」と読み仮名をつけたりすることが一般的に行われていたのである⁴²⁾。このように、トルストイが攻撃した「高尚な愛」と近代日本が理解した西洋的な愛の概念が、歴史的に同じものであったことが分かるのである。こうして、二葉亭とトルストイが断罪していたものの姿は重なって行く。

しかしながら、二葉亭の場合はトルストイと違って、キリスト教の原則をつきつめて行こうとして、このような相対化が行われたのではなく、キリスト教の教義の否定の上にこれは出てきている。キリストの言葉にたちかえり、信仰上の虚偽を徹底的に追放しようとしてあがいていたトルストイも、二葉亭にとっては批判の矛先でしかない。そこで、彼は日記に次のように記すのである。

トルストイはひとりよがりの哲人也、

トルストイは己れの *logics* ヲ信シ其上ニ信仰ヲ安置ス

故ニ其提出セル惣ての *arguments* に破れむには其信仰は根本より覆へざるべし⁴³⁾

もちろん、この「信仰」は、取り敢えずキリスト教の教義を指している。そして、『平凡』には次のように書いている。

トルストイは北方の哲人だと云ふ。此哲人は如何なことを言つてゐる。クロイツェル、ソナタの跋に、理想の完全に実行し得べきは真の理想でない。完全に実行し得られねばこそ理想だ。不犯は基督の理想である。故に完全に実行の出来ぬは止むを得ぬ、唯基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言つて、世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮らせと勧めてゐる。

何の事だ？些とも分からん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきではないか？不犯が理想で、女房を貰つて、子を生ませてゐたら、普通の墮落に輪をかけた墮落だ。[……]

今食ふ米が無くて、ひもじい腹を抱えて考へ込む私達だ。そんな伊勢屋の隠居が心学に凝り固まつたやうな、そんな暢気な事を言つて生きちやゐられん！⁴⁴⁾

二葉亭にとって、ロマンティックな傾向を持つ文学者が描き出す「神聖で高尚な」愛が虚偽ならば、トルストイの説く絶対的貞潔の理想も虚偽なのである。

二葉亭とトルストイの議論がかみ合わないのは、二葉亭が精神的な神の王国という理想を受け入れていないからだと言える。トルストイは『クロイツェル・ソナタ』の「後書き」に、次のように説いている。貞潔を守るのが理想で、全員がそれを達成したとき、人類は滅びて神の国が到来する、だが、その理想を守れない者はせめて結婚をし、その中でなるべく貞潔に暮らすようにするのがよい、それでも子供が出来れば、その子に理想を達成する義務が受け継がれて行く、と。二葉亭は「後書き」も読んでいたはずであるが⁴⁵⁾、そうした理想を受け入れることができないからこそ、精神的な神の王国の到来を認めることができないからこそ、現実の生活で理想が成就できなければ死ぬしかない、としか言えないのである。

こうして、二葉亭四迷は「平凡」と彼が呼ぶ境地に向かつていく。それは、「ひもじい腹」の表現でも分かるように、恋愛の問題も、婚姻の問題も日々の現実と捉え、そこに形而上学的なカテキズムを持ち込むようなことはしないという立場である。そして、精神主義的な恋愛観は、「伊勢屋の隠居の心学」の言葉で片付けられてしまう。こうして、二葉亭は、恋愛は、そして性欲は、高尚でもなければ下劣でもない、「インヂフェレントな」ものだ、という信念に至るのである。そして、下劣であると考えたのはトルストイであり、高尚であると考えたのは若い頃の自分であり、また、日本のキリスト教系の文学者たちであり、西洋近代のロマン主義文学だったのである。二葉亭は『クロイツェル・ソナタ』の手法には感服しつつ、トルストイの思想には反発するわけで、トルストイから受けた影響はアンビヴァレントなものだったと言えるが、『平凡』で展開された理屈自体もまた、このように複合的・重層的なものであったのである。

ところで、このように二つの性愛観を斥けた二葉亭は、代わりにどのような恋愛の形

を提示するのだろうか。主人公の古屋は意中の人である雪江さんが部屋に来たとき、何か声をかけてきっかけを作りたいと思って、次のように思案する。

此梅曆に拠ると、斯ういふ場合に男の言ふべき文句がある。何でも貴嬢は〔友達が結婚するのが〕浦山敷く思はないかとか、何とか、ヒヨイと軽く戯談を言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見やうか知ら……と思つたが、何だか、どうも…ソノ極りが悪い⁴⁶⁾。

古屋が結局は『春色梅曆』の手法を実践できないことは、彼に近代的なものの手垢が既にまわりついていることを意味している。実際、雪江さんへの思いが挫折した後、古屋は友人たちのように遊廓でのいわゆる「遊び」に徹することができない。しかし、少なくとも『梅曆』の世界は、到達すべき境地として肯定されているのである。雪江が部屋に来た時、古屋の頭に広がる妄想を覗いてみよう。

雪江さんは処女^{むすめ}だけれど、乳の処がふつくりと持上つてゐる。大方乳首なんぞは薄赤くなつてゐるばかりで、有るか無いか分るまい……などと思ひながら、雪江さんの面ばかり見てゐると、いつしか私は現実を離れて、恍惚となつて、雪江さんが何だか私の……妻でもない、情人でもない……何だか斯う其様なやうな者に思はれて、兎に角私の物のやうに思はれて、今は斯うして〔下女の〕松といふ他人を交せて話しをしてゐるけれど、今に時刻が来れば、二人一緒に斯う奥まつた座敷へ行く。と、もう其処に床が敷つてある。夜具も群内^{ぐんない}か何かだ。私が着物を脱ぐと、雪江さんが後からフワリと寝衣^{ねまき}を着せて呉れる。今晚は寒いわねえとか雪江さんがいふ。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帯をグルグルと巻いて床へ潜り込む。雪江さんが私の脱棄を畳むである。其様な事は好加減にして早く来て寝なと私がいふ。あいといつて雪江さんが私の面^{かほ}を見て微笑する……⁴⁷⁾。

ここにあるのは人情本の発想、花柳情緒の描出以外の何物でもないだろう⁴⁸⁾。同じく性欲の心理を赤裸々に扱いながら、トルストイが暴露した邪悪な肉欲の心理からははるかに遠い世界だといえる。トルストイは『クロイツェル・ソナタ』を書いた時、キリスト教の本義にかなう純潔な関係の重要性を唱え、これにあらゆる性的な関係、特にロマンティックな愛の神話や結婚の制度で偽装される男女関係を対立させた。ところが、二葉亭はこの両方を否定しるのである。この際の否定の論理は、次のようなものだったと解釈できるだろう。つまり、男女関係の問題は眼前の現実であり、その意味で肉体を否定し、捨象するものではあり得ず、また、善悪の範疇とも関係がなく、したがって理想に向かうというような高尚なものではない、と。

トルストイは愛が精神的であり、道徳的であるべきことを執拗に主張するが、このこと自体は透谷の意見と何ら変りがない。それに対して二葉亭は、男女の愛をより神聖になるため、より道徳的になるため、そして、より精神的になるため、という枠組で考え

ることを一切拒否する。彼は男女関係というものを宗教的判断と結び付けて考えることを停止し、どのような恋愛が「神聖か」というような問題意識を抹消しようとするのである。それは、二葉亭にとっては、トルストイの論理も、トルストイの否定したロマン主義の、そして近代西洋の恋愛観も、どちらもキリスト教的発想と堅く結びついていたからなのである。したがって、この両者の否定は、二葉亭がキリスト教をひとりよがりの教義として否定したとき、必然的に起こってくる。

トルストイは『クロイツェル・ソナタ』の中で、いわゆる「愛」をさまざまな語で言い替えているが、その際にしばしば、*нравственный* というような特質と結び付けて、それは考えられている。ロシア語の *нравственный* が「道徳的」、「精神的」の両様の意味を持つことはこの際、象徴的な意味を持っている。ポズドヌイシェフはこう論じていた。

[……] самая возвышенная, поэтическая, как мы называем, любовь зависит не от нравственных достоинств, а от физической близости [……] ⁴⁹⁾.

すなわち、*нравственная* と呼ばれている愛は、*духовная* であるべきなのに、実体は、*чувственная* に過ぎない、それにも関わらず、それが *духовная* だと詐称されているというのが、トルストイの議論である。この批判の是非は別にして、トルストイの批判するロマン主義文学の恋愛観の中に現れる「肉体的」、「道徳的」、「精神的」というような諸概念自身は、二葉亭から見れば全てキリスト教のコンセプショナル・フレームの枠内にあったことになる。ここでは、男女の愛は常に肉体と精神という二元論的緊張関係の上にある。透谷らは——そして、若き日の二葉亭は、そこを立脚点にして、トルストイとは逆に理想的恋愛、霊的な愛といったものを発想したわけで、二葉亭の「平凡」の哲学はこれに予先を向けているのである。

「私共 [日本人] の恋は性欲に過ぎない。そして、性欲自体は中性のものだ」と語る時、二葉亭が拒絶したのは、男女の愛を精神的愛と肉体的愛に分割し、精神的愛の方が道徳的に高く、神の意に適うとする二元論的な発想だったのである。

このような二元論的発想、そして、性愛を道徳的・宗教的な善悪のカテゴリーで考える思考法を近世の日本人はほとんど持っていなかった。そして、明治の文学者の視座からすれば、そのような発想を強力に支えていたのは、いかなる立場をとるにせよキリスト教の概念体系だったのである。そのキリスト教の教義を否定する時、「高尚の愛」という神話も崩れていく。ところが、超越的理想への希求というようなモメントを持たず、直接的な快楽を肯定するような恋愛観、それはとりも直さず人情本の論理であり、「粹」の倫理ではないのか。神聖でもなければ下劣でもない「平凡な」恋愛というものを思い描き、キリスト教と結び付いた西洋の恋愛観を否定した時、二葉亭は江戸時代の人間にとっての愛に戻って行くしかなかった。そして、その愛とは、トルストイが「後書き」の中で、「現代ヨーロッパ人の不道徳な婚姻生活よりは、悪名高い日本人の公娼制度を採用した方がまだましだ。」⁵⁰⁾と書いた、その制度に連なって行くものだったのである。

一注一

- 1) 二葉亭四迷全集第十卷，東京，岩波書店，1953年，18-19頁。以下，二葉亭の作品からの引用は全てこの全集に基づき，巻数（漢数字）と頁数（アラビア数字）のみ註に示す。なお，漢字を新字体に改め，ルビを取捨選択して付した。
- 2) 二葉亭が数多くの『クロイツェル・ソナタ』の版のうち，どれを読んだのかは不詳である。しかし，二葉亭が強い刺激を受けたのは，一定のメッセージの主張のために作品を組み立てるというトルストイの書法であり，また，そのメッセージの内容自体であり，プロットの細部や，性格描写などの面で受けた影響はほとんどないと思われる。したがって，版の問題は，ここでは大きな意味は持たないとしてよいだろう。
- 3) Толстой, Л. Н., *Полн. собр. соч.* (Юбилейное издание), М., 1936 г., XXVII, стр. 34. 以下，トルストイの作品からの引用は全てこの全集に基づき，巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）のみを示す。なお，訳文は全て村上によるもの。
- 4) XXVII, 22.
- 5) 『クロイツェル・ソナタ』最終稿では，「愛」(любовь)の語は，いわゆる詩的な愛，すなわち，トルストイの考えでは「肉欲」という意味に，ほぼ限定されて使われている。このことは『クロイツェル・ソナタ』に一貫した明快性を与えており，トルストイの「理屈」が成功した大きな理由の一つとなっている。「愛」を「肉欲」という，一般に「愛」と全く正反対の意味で用いられる語に宛てたことで，トルストイは強烈な効果を作り出したのである。
ところが，『クロイツェル・ソナタ』の第一稿では *любовь* の語は「キリスト教的な精神愛」の意味で用いられたり，「偽りの愛，色情」の意味で用いられたり，使い方が一定していない。例えば，全集360頁の9，12行目では前者，同じ頁の19行目では後者の意味で使われている。また，「人間の愛」(*человеческая любовь*) というような表現が「神の愛」に対して，低い，肉体的愛として対置されている箇所もあれば，同じ「人間の愛」の表現が「動物的愛」に対する精神の愛として対置されている部分も見られる。こうしたふらつきのために第一稿は訴える力が弱いのである。この草稿が，結局放棄されるに至るのも，そういった事情が介在しているのかも知れない。
- 6) Николаев, М. П., *Л. Н. Толстой и Н. Г. Чернышевский*, Тула, 1978 г., 及び Peter Møller, *The Postlude to "The Kreutzer Sonata"* (transl. by John Kendal, Leiden: E. J. Brill, 1988) の第4章などを参照されたい。
- 7) 前出のニコラエフの著書では，トルストイは，最初は『何をなすべきか』で表明されていた進歩的な恋愛観・婚姻観に反対して『感化された家族』(*Зараженное семейство*)などの作品を書いたが，後に『アンナ・カレーニナ』その他で，気質の一致する夫婦というチェルヌイシェフスキー的理想を認めるようになったと論じられている(ニコラエフ, *там же*, стр. 64-73)。トルストイを革命的民主主義者たちに引き付けて理解しようという，あからさまなバイアスであり，少なくとも『クロイツェル・ソナタ』においてトルストイが近代的な婚姻観を揶揄していることは疑いを容れない。
- 8) XXVII, 10. もちろん，『クロイツェル・ソナタ』の発表は1890年であるから，60年代の進歩的理念は既に旧聞に属するが，それが依然としてロシアでは実現されていない，新しい西欧の制度であったことは後で見る引用からも明らかであろう。
- 9) Алексеев, Н. А. (ред.), *Непубликованные произведения Н. Г. Чернышевского*, Саратов, 1939 г. に収録されている。
- 10) 「そのことについてはルソーが『新エロイズ』の中で語ったのだ。この小説から，ルソーから，人々は私 [平等な男女間の愛] のことを始めて聞いたのだ。」(Чернышевский, Н. Г., *Полн. собр. соч.* т. X I, стр. 274) 他にジョルジュ・サンド，ディッケンスの影響が指摘されている。
- 11) XXVII, 12.
- 12) XXVII, 21.
- 13) この，近代市民社会が作り上げた恋愛結婚の思想は，恋愛・婚姻・生殖を家庭 (*home*) 内に一致させるという思想であった。これについてはフーコーの分析がある(М. フーコー, 『性の歴史 知への意志』渡辺守章訳，東京，新潮社，1986年)。

- 14) もっとも、ほぼ同じ時期に執筆が開始されながら、『芸術とは何か』の方は、はるかに遅れて1897年に完成を見るのである。
- 15) XXVII 358. 表記を現代の正字法に改めた。
- 16) Толстой, Л. Н., *Полн. собр. соч.* (Юбилейное издание), М., 1951 г., XXX, 88.
- 17) XXX, 142.
- 18) XXVII, 80-81.
- 19) 《[……] прожило без истинного искусства не всё человечество и даже не значительная часть его, а только высшие классы христианского европейского общества, и то очень сравнительно короткий период времени: от начало возрождения и реформации до последнего времени.》(XXX, 81)
- 20) この問題は、ただちにロシアに市民階級は存在したのか、ルネサンスや宗教改革があったのかという問題につながってくるであろう。そのような問いには否定的に答えざるをえない。また、『新エロイズ』で成立したような愛がロシアの社会に存在したのだろうかという問題もあり、事実、『クロイツェル・ソナタ』においては、それは否定されているのである。つまり、トルストイは存在してもいないものを批判しているという奇妙なことになるのであるが、少なくとも、トルストイが『クロイツェル・ソナタ』の中で弾劾し、イメージしているところの恋愛が、西洋近代の市民社会のそれであり、トルストイは、西欧の理念を追おうとしていたロシアの上流階級を難じていたのだということは言えよう。
- 21) 例えば、《Ведь подразумевается любовь духовная, а не чувственная. Ну если любовь духовная, духовное общение, то словами, разговорами, беседами должно бы выразиться это духовное общение》(XXVII, 27)
- 22) 1891年2月。
- 23) 一, 20。
- 24) 一, 71。
- 25) 一, 19。
- 26) 一, 130。
- 27) XXVII, 10。
- 28) XXVII, 14。
- 29) 『北村透谷集』(明治文学全集第29巻) 東京, 筑摩書房, 1976年, 72頁。
- 30) 松下貞三『漢語「愛」とその複合語』(京都, あぼろん社, 1982年) による。
- 31) シェーカーの禁欲思想と『クロイツェル・ソナタ』の創作の関係については、グージーなどが日記の記述などと照らし合わせて、綿密に追跡している。(Гудзий, *Как работал Толстой*, М., 1936 г.). もっとも、メーラーは草稿の執筆時期などの問題に独自の見方を取って、トルストイの意見がシェーカー教徒の影響下に形成されたわけではないことを示唆している。(Møller 前掲書, 第一章)。ここではトルストイの思想と、ピューリタニズムの性愛観の類縁性を問題にしているので、この説の真偽は本稿の論旨と関係がない。なお、トルストイとプロテスタンティズムの関わりについては、さらに Franz - Heinrich Philipp, *Tolstoj und der Protestantismus*, Gießen, 1959を参照されたい。
- 32) ストックマンはロシアでのトルストイとの会見を綴った記録 (*Tolstoi. A Man of Peace*, Chicago, Alice B. Stockham & Co., 1900) の中で、「クェーカー教徒である自分が盗族を恐れたりするだろうか」と書いている。もっとも、メーラーはここでもグージーの説に反対し、執筆の時期から考えて、『産科学』が『クロイツェル・ソナタ』創作に際しての、トルストイの思想形成に与ったということとはありえないと論じている (Møller 前掲書, 第一章)。しかし、本稿での関心は『クロイツェル・ソナタ』の本文が『産科学』の読書によって、いかなる変化を被ったかということではなく、当時のトルストイの気分がいかにピューリタンのものと相通じていたか、ということである。したがって、『産科学』の著者アリス・ストックハムがクェーカー教徒であったことは大きな意味を持つと思われる。
- 33) このことは、数年後に『産科学』の続編としてストックハムが書いた『カレッツァ 結婚の倫理』(*Karezza. Ethics of Marriage*, Chicago, Stockham & Publishing Co., 出版年不詳) の次のような記述からも窺い知ることができるだろう。「われわれは精神的存在として生きている。[……] 生徒の

心の中で神，生活，法が同意語になるとき，物質の科学と精神の科学は手に手を取って，存在の諸問題に答えるであろう。」(p. 111)

- 34) XXVII, 356.
- 35) XXVII, 268.
- 36) 拙稿「ロマンティック・ラヴの成立と崩壊——二葉亭四迷の場合——」(『比較文学研究』第46号，東京，東大比較文学研究会，1985年9月)を参照されたい。
- 37) 二葉亭は日記「落葉のはきよせ 二籠目」で「ヴィネー」の名を挙げており，「神理は知識を以て解すべからずして心を以て解すべし」(十一，54)という引用を書き付けている。これは，福音主義の神学者，Vinet, Alexandre - Rodolphe (1797-1847)を指していると思われる。ヴィネーは，神学上のドグマではなく，各人の良心が道徳的な判断の基になるべきだという主張で知られ，19世紀中葉にはその著作の英訳がいくつか出版されている。二葉亭はこの英訳のいずれかを読んだのであろう。
- 38) 十，41。
- 39) 七，167-168。
- 40) XXVII, 32.
- 41) 『国民之友』東京，民友社，1895年9月，15頁。
- 42) 柳父章『翻訳語成立事情』(東京，岩波書店，1982年)の「恋愛」の章を参照。
- 43) 十三，33。
- 44) 七，166-167。
- 45) 既に引いた『平凡』の中の文章，「基督教徒は之を理想として終生追求すべきである，と言って，世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮らせと勧めてゐる」は，トルストイの「後書き」の次の文章と対応していると考えられる。すなわち，《Что делать мужчине и женщине, живущим в браке [……] ? / Всё то же : стремиться вместе к освобождению от соблазна, очищению себя и прекращению греха, заменой отношений, препятствующих и общему и частному служению Богу и людям, заменой плотской любви чистыми отношениями сестры и брата,》(XXVII, 90-91)という箇所。
- 46) 七，159-160。
- 47) 七，163。「ラヴ」という振り仮名が，ここでは「情人」という語に宛てられていることにも注目しなければならない。この用法はまさに二葉亭の意識のありよう，『浮雲』の地点からの変容を象徴的に示しているのである。
- 48) 二葉亭の人情本——ひいては，広く江戸文学の読書については，初期の日記や，『予が半生の懺悔』などの談話筆記から窺い知ることができる。それによると，二葉亭が若い頃に八文字屋本，三馬，西鶴などに親しみ，また，浄瑠璃や清元などにも詳しく分かったことが分かる。もちろん，そのような読書経験を考えに入れなくとも，「粹」や「色道」の世界が明治の文学者にとって十分に現実的なものだったことは言うまでもない。
- 49) XXVII, 22.
- 50) XXVII, 89.

なお，本稿は，1989年7月に鈴木奨学金を受けて北大スラブ研究センターで行った研究，1990年7月にソ連科学アカデミー世界文学研究所の招待でモスクワで行った調査の成果である。記して，お世話になった方々に感謝したい。

The Christian Discourse of Love and Sex in Crisis

— Two Ways of Protest : *The Kreutzer Sonata* and *Mediocrity* —

Takayuki MURAKAMI

The purpose of the present article is to make a comparative analysis of Tolstoi's *The Kreutzer Sonata* and its rough adaptation in the Japanese language by Futabatei Shimei, *Mediocrity*, with an emphasis on their messages as regards sexual love. The comparison is expected to shed light on the general features of the Russian, and to some extent Western, discourse on love and sex and the Japanese concepts.

Tolstoi's *The Kreutzer Sonata* is known for its radical message, openly advertised by the author himself in its Postscript. Here, the novelist argues : any kind of sexual relation corrupts human-beings ; marriage is no exception to this, and there exists no such thing as Christian marriage; so-called romantic love does not justify sexual relation or marriage.

Tolstoi's arguments against love and sex can be considered as primarily driven toward the *romantic love ideology* that modern Western society produced. He caricatures the men of Russian high society who deplore the lack of this ideology in Russia, supposedly relying on the notion of marriage based on the similarity of characters and the unity of ideals, depicted in the progressive novels in the sixties.

Tolstoi totally rejects this idea and reduces love to sexual lust, thus condemning anything called poetic sentiment as base and rejecting even the sexual relationship within marriage as a violation of the Christian code.

Tolstoi formed his ideas under the influence of some Puritan thinkers, i. e. the Shakers and the Quakers. In fact, his notion of total abandonment of sex can be understood as an extreme case of Puritan asceticism.

It is interesting to note here that in modern Japan the idea of Western romantic love was introduced by the Puritan writers or those much concerned with Puritanism, including Futabatei Shimei himself. Their idea of love consisted in placing love as a central value of human life, as a basic facet of any marriage and as something based on the friendship and mutual understanding of the partners.

This idea clearly reflects the romantic love ideology that the Puritans have created to fit the ideal of the modern civil society. It was, as it were, another solution for the Puritans to compromise with the essentially base nature of a sexual act, excused and praised within the sanctified marital relation. Thus, the Japanese Puritans defined their idea of love by such terms as *spiritual love*, *sacred love* and *elevated love*.

Futabatei Shimei, however, abandons his youthful ideal and arrives at the rejection of Christian doctrine and romantic love ideology in his later years. This is represented in his last novel *Mediocrity*, being a rough adaptation of *The Kreutzer Sonata* with semi-autobiographic nature.

In the novel he condemns Tolstoi's philosophy as metaphysical, insisting that the nature of love among the Japanese is neither sacred nor base but mediocre, or neutral. And then, the hero of the novel, and presumably the author, starts to narrate his own story of love, which appears considerably close to the pre-modern Japanese erotic literature in its theme and style.

Thus the comparative analysis of *The Kreutzer Sonata* and its adaptation shows that the Western discourse of love, sex and marriage, whether the three coincide with one another or contradict, has been more often done in the context of religious considerations, here mainly Puritan thinking, while Japanese notions of love by the 1860's had almost completely done away with such an element and had made love an essentially secular notion, which Futabatei might have named the *mediocre* tradition.